

語種と略語—補説—

大槻 美智子

1 語種と略語—前稿の要点—

略語には、単語の後半部分を略す〈下略〉が非常に多い。それは動かない事実であろう。しかし、語種によって、またそれが単純語か複合語か、複合語でも単種か混種かあるいは前項か後項かによっても、どういう略し方が優勢かは異なってくると思われる。その詳細な数値については、さらに精確を期すため別稿を準備したいが、その大よその傾向は前稿（大槻2002）に述べた。本稿では、前稿の要点をまとめるとともに、川上真紀子2001「造語成分からみた語の省略法の類型化」の主張を通して、語種という視点の必要性を再説したい。

本稿で用いる術語は以下の通りである。

いわゆる単純語をここでは「単独語」と称する。「単純」ということばの持つニュアンスがしっくりこないということもあるが、略語の世界では、「おせんべい」が「おせん」、「ご馳走」が「ごち」になるように、派生語が単純語と同様に遇されるからである。

また「複合語」とした中には、“単語”としての語形の存在が確かめられないものも多い。複合略語の造語構造を考える上では、「朝・練習→朝練」「うなぎ・重箱→うな重」「にら・玉子→にら玉」のように、二つの形態素の結びつきが存在するだけで十分だからである。また句的なもの——「きれる・寸前（→きれ寸）」「超・むかつく（→チョむか）」なども同様に、「複合語」同等のものと位置づけられる。

単語	{	単独語	【語基】	および	{	〈和語〉 うなぎ、どんぶり、おせんべい
						〈漢語〉 学校、食堂、流行性
						〈外来語〉 サンドイッチ、コンピュータ、 パンツ
						【接辞+語基】

略／上略＋下略／上略＋無略／上略＋全略、無略＋下略／無略＋上略／無略＋全略、全略＋下略／全略＋上略／全略＋無略」の14パターンが考えられる。また複合語における各省略形式の計量は、前項・後項のいかんを問わず延べ語数で集計した結果である。

上記14パターンのうち、「無略＋全略」「全略＋無略」については、これらを統計から省いた（複合外来語ではこれらの用例数は膨大なものになる）。というのは、「無略＋全略」——「携帯（電話）、アンカー（マン）、サミット（ミーティング）、あきす（ねらい）、ベレー（帽）、いんげん（まめ）、ゲラ（刷り）」や「全略＋無略」——「（電気）スタンド、（セルフ）タイマー、（ブランド）ピント」については、個々の単語によって若干の程度差はあるものの、省略形だという意識をもたずに使っている場合が多いように思うからである。

たとえば、森岡1988は、「『百科辞典』をジャッカというのは、臨時的な場面で朝日新聞をアサヒというのと同じで、略語としての社会的な資格に欠けるように思われる」と述べている⁽²⁾。上にあげた諸例は、場面依存的な状況の中で生まれた臨時的な省略が定着したもので、略語と意識されにくいもの、といえよう。

さて、現代語で、数量的に大きな割合を占めている外来語略語（以下、カタカナ略語と称することもある）は、表1からわかるように、単独語でも複合語でも8割方が〈下略〉である⁽³⁾。それに対して、単独和語では〈上略・下略〉の使用は同程度と予測されるが、複合語になると〈下略〉が6割強を占め、逆に〈上略〉の見られないことが大きな特徴となっている。

外来語と比較して、単独和語で〈上略〉が大きな位置を占めているのは、語の上部を略す省略形式が元の語形を想起しにくいことから隠語を作るのによく用いられる⁽⁴⁾という点と関わっている、と考えている。もともと単独和語の省略例は少ないが、それは音節数の少ない言葉をわざわざ略す必要がないからである。それをあえて略すのは隠語を作るためと考えるのが穏当であり、隠語という目的のためには〈上略〉がふさわしいのであった。

しかし、和語も複合語となり音節数が多くなると音数短縮の目的が生じて〈下略〉が増える。〈下略〉は元の語形が想起しやすく、音節数の短縮には最もふさわしい省略形式だからである。

一方、単独和語と同様、もともと音節数が少ない単独漢語ではどうだろうか。やはり省略方法は単独和語と同様〈上略・下略〉の使用が同じ位になるだろうと見られる。しかし複合語になった場合、漢語は文字の表意性に支えられて複合和語とは異なるふるまいをする。

川上が、複合漢語（四字熟語）の80%が「一字目と三字目」が採用される「1・3」型（これは本稿の「下略+下略」に同じ）であると指摘しているように、〈下略〉が基本であることは動かないにしても、漢語の場合はその基本にプラス α が働くことを見逃すわけにはいかない。複合語のどの部分を残すかは構成要素である字義に依存する部分や、既存の漢語との関係を考慮する余地があるのである。

たとえば、「(自)宅浪(人)」を、「宅浪」でなく「自浪」と略せば、「自-」（「自主・自発・自由」など）の造語成分の持つ〈自主・自在〉の意味が前面に出てしまうし、「外(国)(通)信」が「外通」では造語成分「-通」（「食通・通人」など）の持つ〈何かによく通じている、知っている〉という意味になり原語との間に齟齬を生じる。「高等学校」が「高校」となるのには、「高学」では「大学」との意味差が出ない、あるいは「高額・好学・光学・向学・後学・工学」などの同音意義語が多く紛らわしいなどの理由が考えられよう。

また、漢語には、似た意味を持つ語が重複して出来ているものがある。西尾1980は、「超過勤務」の省略形として「超勤」「過勤」を比べても「意味識別性からの優劣はつけにくいだろう」とする。このように「超・過」のいずれを残しても意味的にさほど変わりがない場合、複合語の語頭（前項）では〈下略〉が優先され、また、類義重複漢語が後項にある「行政改革」などの場合は、〈下略〉などの形式よりも、「改-」（改正・改訂など）と「-革-」（革新・革命・変革）の字義からの比較選択や同音異義語の有無（ギョウカクには無いがギョウカイだと「業界」と紛らわしい）などが、文字選択の際に重要になると考えられるのである。

このように、複合漢語の場合には、その意味構造、前項か後項かの位置、造語成分の意味、既存の語との関係などが、略語生成の重要な要因となっており、その点から、複合和語とは異なり〈上略〉が見られる結果になると考えている。

このように、省略形式の選択と語種には少なからぬ関係が見て取れるのである。しかし、従来、略語の解説においては、語種ということをしてそれほ

ど明確には意識してこなかったように思われる。略語の議論は、語種ということに配慮せずいろいろな例をあげて見せただけというところがあったため、その性質・特徴が、略語一般に言えることなのか、特定の語種についてのものなのかが明確でなかったように思う。特に、和語・漢語の省略については詳細な研究がなされているとは言い難い状況である。

以上、簡単ではあるが、略語の造語法を考える際には語種を考慮する必要があるという、前稿の要点をまとめて述べた。

2 語種を考慮する必要性—補説

略語の省略を考えるには、語種ごとにその特徴を見てみる必要があろうと考えていたおり、川上 2001 を読む機会を持った。川上論文には、大きく二つのことが述べられているように思う。一つは、略語の形成を、原語から直接ではなく「省略形造語成分」という段階を経て考えるべきであるという指摘。もう一つは、省略される単位と成分（文字・音）の性質により「省略法のパターン」を示すという方法を提言されたことである。

前者の、「造語成分」という観点をもつことは、たとえば、「トレパン」の「トレ」や「パン」は「トレーニング」や「パンツ」の省略形だということだけでは不足で、複合略語の生成はいわゆる合成語のそれと同じなのだという認識を明確にした点。さらに、たとえばこれらの語基は単独で使用されることはなく複合語の一部となってはじめて機能するものであって、同じ省略形でもアイスクリームの「アイス」とは働きが異なるのだということ認識させる点でも、大変重要であると思われる。しかし、ここでは、後者の「省略法のパターン」について検討したい。

さて、川上論文が示した造語類型には啓発されるが多かったが、若干意見の異なるところもある。それを指摘しながら、川上の示したパターンが語種の別といかに結びついているかについて述べたいと思う。

川上 2001 には、省略法の類型を、「省略される成分のレベル差」（縦軸）と原語との共通性が「音（形態）」にあるか「文字（表記）」にあるかの相違から分類したもの（横軸）が示されている。図示すると次のようである（表 2）。

表2

	表記共通	形態共通
レベル 1	<Ⅰ型><アルファベット頭字型> OL [office lady] ABC [Asahi Broadcasting Corporation] など ----- <Ⅱ型><漢字読み替え型> 阪神 [大阪 神戸] 落研 [落語 研究会] など	<Ⅲ型><形態短縮型> プロ [プロフェッショナル] うなどん [うなぎ どんぶり] ハウる [ハウリング] など
レベル 2		<Ⅳ型><結合要素型> 高校 [高等 学校] 特番 [特別 番組] など
レベル 3		<Ⅴ型><自立要素型> 雇用法 [雇用対策法] 七味 [七味とうがらし] など

表内の術語の説明を川上論文から引用する。

レベル1：最少単位の形が変形しているもの。

レベル2：最少単位の形は保存されているが、最少単位2個からなる分析単位の形は変形しているもの。

レベル3：分析単位全体が省略されるもの。最少単位1個からなる分析単位はもちろん、最少単位2個からなる分析単位も、単位全体が保存されるか省略される。

「最小単位」とは、「現代語としての意味を担っている最小の言語単位」(『電子計算機による新聞の語彙調査』)でほぼ形態素に等しい(語基のほか、漢字一字、接辞など)。「分析単位」とはそれらが接合して形成する単独語や複合語(意味・機能の上でのひとまとまり)をいうと理解できる。

また、「表記共通」とは原語とその省略形である略語が表記において共通性を有しているという意味であり、「形態共通」とは、原語と略語が音声上の共通によって同一のものであると認定されていることを意味している。

たとえば、<Ⅰ型>NHK [エヌ・エイチ・ケイ (またはケー)] は原語の「日本放送協会」と音声的な共通点を持たないが、アルファベット表記した「**N**ippon **H**oso **K** yokai」の頭文字と共通性を持つ。また、<Ⅱ型>阪神おちけんや落研のような「音訓転換による省略化」も「音声上の共有点はみあた

らず、視覚的な共通性を利用した省略化である」という。ために、両者は「表記共通」に分類される。そして、〈I型〉も〈II型〉も同じく、レベル1「最少単位の形が変形しているもの」であるとする。

たしかに、「大阪+神戸」のように二つの概念が結合するとき、[(おお)さか]が文字「阪」を介して[ハン]に、[こう(べ)]も文字「神」を介して[シン]に結びつき「阪神(ハンシン)」という略語が生まれる、という点で、この略語は原語と表記を共有してはじめて成立しているものであり、音との結びつきは一次的には断たれたと言ってよいだろう。つまり「最少単位の音は変形して」おり、川上のレベル1の「最少単位の形が変形しているもの」の「形」とは「音」を意味しているもののようなものである。〈III型〉がレベル1であることもそれを証している。

さらに川上は、「このうちレベル1に関しては、省略された成分を意味の面から記述することはできない。」(p.9)とする。たしかに、「うな(ぎ)」の「ぎ」や「プロ(フェッショナル)」の「フェッショナル」は意味を担っていないし、「N(ippon) H(oso) K(yokai)」の省略部分は意味を持たない存在である。しかし、「落研、京浜、阪神」などの場合はどうだろうか。

たとえば「東京+横浜」から出来た「京浜」の「^{ケイ}京」は『とうきょう』とも『トウキョウ』とも『TOOKYOO』とも関わらず」そのため「省略された成分も意味を担う成分や形態とはいえない」(p.11)という。しかし、「京」が意味と関わらないという点は首肯することができない。「京」は音が何であれ、「京」という文字を通して「東京」という意味と密接に結びついている。「帰京・上京」などの語の存在もそれを助けるだろう。

森岡 1988はこの類の例を、「呉音・漢音の読み替え、音訓の入れ替え、熟字訓の音読みあるいは訓読みなどによって、直接に形態素を示さず、漢字に依存して形態素を示している」(傍点-大槻)ものと位置付けている。そもそも、たとえば「落研」と「高校」の相違は何なのだろうか。それらはともに、川上が〈IV型〉を定義する「原語の2形態素からなる分析単位において、そこに含まれる最小単位のいずれかを、最小単位の切れ目にそって省略するもの」(p.12)であり、文字という形そのものも表わす意味にも変化がないものなのではないだろうか。ただ、異なりは〈II型〉が「文字」の共通性に依存して音を変形させただけのことである。

漢字という「文字」は即意味を表わす。そして「文字」はその形を通してわかちがたく「音」と「意味」を結びつける。それだからこそ、「文字」

を介した「音」の変形〈Ⅱ型〉が可能なのではないだろうか。この働きは漢字という形態素の特徴である。その意味では、〈Ⅱ型〉は実は、原理的にはレベル2の〈Ⅳ型〉に等しいと考えられる。

そして、レベル2の定義は「最小単位の語形は保存されているが、最小単位2個からなる分析単位の語形は変形している」とすべきだろう。「語形」とは「表記=文字」のことである。そして、〈Ⅱ型〉はレベル2に移行させよう。川上の〈Ⅳ型〉の定義は、筆者のレベル2の定義はそれと全く同じものである。

ただし、〈Ⅳ型〉=レベル2を〈結合要素型〉とは名づけない。これは、基本的に四字熟語をにらんだ命名である。略語の造語成分の分類では、複合語を形成するか否かは考慮の外にすべきである。つまりここには、複合語だけでなく「(警察)や「(麻)薬」などの単独語も属させることができるのである。混種複合語の漢語の部分もここに分類される。「いた(ずら)・電話」「合(同)・コン(パ)」「アル(コール)・中(毒)」などである。「自(動)販(売)機」の「機」も最小単位と分析単位が一致する語基と考える。

以上のことから、レベル2は基本的に「漢語」の略語生成の場と位置付けられよう。

また、レベル1もレベル2に倣って「最小単位の語形が変形しているもの」と改める。レベル3も含めて表2を書きかえると次のようになる(表3)。また、語例も少し増やして示す。

横軸の「音変化」「音不変化」というのは熟さない言葉だが、省略されずに残った部分の音が、原語の音と比較した時、変化しているかしていないかで分類したものである。よって、縦軸は語形(表記)による分類、横軸は音変化の有無による分類となった。

レベル2が「漢語」のための場所であることは先に述べた通りである。また、川上によれば、レベル1の〈Ⅲ型〉に属するものの8割近くが「洋語である」こと、「和語や漢語は最小単位の拍数が短く、最小単位の形態を変形させてまで短縮しようという意識が低いのか、あまり多くの語例があるわけではない」こと、さらに「漢語の場合は(略)形態素の区切りの部分で省略されることになり(略)特殊な例を除いて、形態短縮型(Ⅲ型)の省略法が用いられることは少ない」(傍点一大概)(p.13)との指摘がなされている。

このことから、レベル1の〈Ⅲ型〉は外来語(洋語)および和語の略語

表 3

	音変化	音不変化
レベル 1 最小単位 の語形が 変形	<Ⅰ型><語種不問> OL [office lady] ABC [Asahi Broadcasting Corporation] KDD [Kokusai Denshin Denwa] DN [dame ningen (ダメ人間)] MM [mecha mukatsuku (むち ゃむかつく)] など	<Ⅲ型><外来語・和語・一部の漢語> プロ [プロフェッショナル] ハウ ^ル [ハウリング] パソコン [パーソナル・コンピュータ] ⁽⁵⁾ さ ^び [わさび] う ^{などん} [うなぎ・どんぶり] き ^{むたく} [きむら・たくや] あ ^{いみつ} [あい・みつもり] など
レベル 2 最小単位 の語形は 保存・2 形態素か らなる分 析単位の 語形は変 形	<Ⅱ型><漢語> 阪 ^{ハン} 神 ^{シン} [大 ^さ 阪 ^か ・神 ^{こう} 戸] 落 ^{おち} 研 ^{ラク} [落語・研究会] 日 ^{ニッ} 教 ^{コウ} 組 ^{クミ} [日本教育組合] 外 ^た 為 ^め [外 ^か 国 ^こ 為 ^わ 替 ^せ] 早 ^{ソウ} 大 ^{ワセ} [早稲田大学] など	<Ⅳ型><漢語> 察 [警察] 葉 [麻葉] 務所 [刑務・所] 高校 [高等・学校] 特番 [特別・番組] 自販機 [自動・販売・機] 流感 [流行性・感冒] いた電 [いたずら・電話] アル中 [アルコール・中毒] など ----- <和語> 信 ^{くみ} 組 [信用組合] 日サロ [日焼け・サロン] は ^ま [よこはま] など
レベル 3 分析単位 (自立要素・種概念) 全体 の語形が 省略され るもの		<Ⅴ型><語種不問> サミット [サミット・ミーティング] ざる [ざる・そば] くわ ^が た [くわがた・むし] 携 ^た 帯 [携帯・電話] 七 ^{しち} 味 [七味・とうがらし] 鉄筋 [鉄筋・コンクリート] 生 [なま・ビール] など ----- <多項漢語> 雇用法 [雇用・対策・法] 回数券 [回数・乗車・券] など

生成の場所であるといえよう。<Ⅲ型>は意味を担わない音の羅列が切り捨てられることで語形が変化する一群である。川上はこれを<形態短縮型>「原語の単位において、最小単位の切れ目とは異なる部分で省略することによって拍数を減少させるもの」と定義する。

なるほど、漢語は「文字=意味」単位で音が切り捨てられ残された語形

を通して原語の意味を想起させるしくみになっている。それに対して、和語・外来語は、意味に関与しない音が切り捨てられることで分析単位の形態（文字）が変形し、変形した語形が原語の意味を代表するというしくみになっている（和語でレベル2に属するものについては後述）。

先にも述べたように、〈I型〉は原理的に〈Ⅲ型〉と同じである。さきほど筆者はレベル1を「最小単位の語形が変形しているもの」と訂したが、それは〈Ⅲ型〉の定義でもある。ABC [Asahi Broadcasting Corporation]、OL [office lady] が、ローマ字表記されたもの（語種には関わらない）を原語とする視覚的な文字省略とすれば、それは「最小単位の語形（表記）変化」であり「最小単位の切れ目とは異なる部分で省略する」ことである。ただ、〈Ⅲ型〉の「語形変化＝文字省略」が同時に原語の音省略でもあるのに対して、〈I型〉は原語と比較すると、音の共通性を放棄し文字省略に終わっている点が異なっているだけといえよう。

〈I型〉には、アルファベット表記の外国語が属することはもちろんだが、現代日本語では、川上のあげる NHK、ABC、KDD のほか、「MM＝マジムカツク」「BMG＝バリマジ切れ」などの造語もなされており、語種に関わりなくローマ字表記されたものの略語生成の場ということになる。

また、川上の指摘する〈Ⅲ型〉に入る漢語の特殊な例とは、「ホ・コ（ウ）・（シャ）／テン・（ゴク）（歩行者天国）」「カ・テ（イ）／キョウ・（シ）（家庭教師）」あるいは「チョー（超）」が「チョ」になるようなもので、いわゆる「若者ことば」に多く見うけられるが、隠語で「ニカ（イ）（二階）」や「ゲソ（ク）（下足）」などの先例がある。漢語が文字を離れて音としてとらえられているとあってよいだろう。

レベル3として、川上は「雇用（対策）法」「割賦（販売）法」「差額（徴収）ベッド」「国土（計画）（利用）法」「育（児）休（業）（制度）」「モンタ（ージュ）（写真）」／「七味（とうがらし）」をあげる。おもに、複合漢語の一部の自立要素が省かれたもので、さらにレベル2の省略が起こっているものもある。

ここには、前章1で狭義の略語から省いた「〈無略〉と〈全略〉の組合わせ」の例も入れたい。「サミット（ミーティング）、ざる（そば）、くわがた（むし）、携帯（電話）、鉄筋（コンクリート）、なま（ビール）」などである。たとえば「ざるそば→ざる」などは、レベル2の「最小単位の語形（「ざる」）は保存、分析単位の語形は変形」という定義にもあてはまりそうである。しかし、これは2形態素のうちの種概念が完全に脱落した例で、「くみあい」が「くみ」になるような変化とは一線を画すべきである

と思われる。よって、ここは語種に関わらずく前項後項いずれかが種概念を表わす複合語〈が属し得る場所であるとしておきたい。

このほか、川上のあげる「雇用対策法」のような三項漢語もここに入る。これらは狭義にも略語といえるものなので、多語基複合の可能な漢語の省略タイプを造語法の中でどう位置付けて行くかが今後の課題である。

それとあわせて言えば、レベル2型の〈IV型〉について、川上は「漢語の例が多数を占める」が「洋語や混種語を原語とするものは [23] のようなものが少数見られる程度である」として、「[23] 日サロ [日焼けサロン]、信組 [信用組合]」の例をあげる。洋語の例についてはわからないが、「くみあい」と「日焼け」について見てみると、「くみあい」が「くみ」に略されることを、「原語の2形態素からなる分析単位において、そこに含まれる最小単位のいずれかを、最小単位の切れ目にそって省略するもの」と捉えるのは、「組合」の文字にひかれてのことではないかとも考える。われわれの意識で「くみあい」を二分析するとしたら、漢字にひかれてのことではないだろうか。和語でも漢字表記が定着した場合はこのような省略がありえるのだろう。

一方、「日焼け」は「日・焼け」と、意識としても分けられる。「日焼け」が「日」になるのは「日焼けサロン」という複合語の内部においてのみであり、その点が「(よこ)はま」「(とも)だち」とは異なるが、「最小単位の切れ目にそって省略するもの」という点では同じである。このようなものを〈IV型〉として位置付けると、「(め)がね」「(あ)ばしり (網走)」「おたま(じゃくし)」などの隠語、さらに「お代(金)」「つり(銭)」などもここに属することになるかと思われる。

また、〈IV型〉に属する和語の単位を漢語の字音最小形態素と同一に考えてよいのかどうか。今後の課題としたい。

3 最後 に

略語の造語法を考える際には、語種と省略法の間を関係を考えておくことの必要性を再説した。

たとえば漢語の省略には文字の存在はかかせない。漢語では、省略の際「文字の切れ目と音の切れ目は一致する」という原則がある。それだからこそ、そこからはずれる「ホコテン (歩行者天国)」や「パンキョ (一般教養)」「カテキョ (家庭教師)」「ドタキャン (土壇場キャンセル)」「チョ

スゴ (超すごい)」の新しさを言うことができるのであり、漢語が文字ではなくカタカナ語や和語と同様に音としてとらえられていることを認識することができる。漢字が文字の呪縛から離れていこうとしている、そういう世界が若者の間には確実に存在している。そんなことにも思いを致すことができるだろう。

一方、和語や外来語は最小単位の切れ目を無視して音のみが略されることが多いが、和語には音の切れ目と意味の切れ目の一致するものがあつた〈Ⅳ型〉。たまたま一致したというのではなく、これは外来語と比べて語源意識 (分析能力) が我々の中にあることまたそれを視覚的にも補強する漢字の使用ということを、和語の特徴として考慮しなければならないことを教えてくれる。

和語は略語の世界ではマイナーな存在である。もともと和語の省略とは何なのか。一応の考えは提示したが、さらに語例を増やして数量的な裏づけをとることや通時的な観点からもその本質を考察して行く必要のあることを痛感している。川上論文を通して、和語・漢語・外来語の、省略における造語原理の基本的位置付けをほぼ明らかにできたと考えている。

[記]

本稿を成すに当っては、『第 18 回 すつきやねん若者ことばの会』(於甲南大学) で発表した(「若者ことば略語の特徴」) 際にいただいたご意見等を念頭において執筆した部分が多い。今回の論文と発表内容とは観点が異なるためそれらをすべてここに反映できたわけではないが、別稿を以って補いたい。記して感謝申し上げます。

注

- (1) 若者ことばに、「むず(かしい)」「なつ(かしい)」「気も(ち悪)い」「なにげ(なく)に」「しく(じ)る」など、形式的には中略と呼べそうなものが増えていく。しかし、これは〈下略〉造語成分に文法的な要素を示す接尾語「い」「に」「る」を付加したものとみなした方がよいと考える(窪園 2002 にも指摘あり)。よって統計上〈下略〉として処理した。

和語の用例では、業界用語、若者言葉のほか、「おせん」「お玉」「おむつ」などいわゆる女房言葉の省略語や、犯罪・警察関係の隠語が多く、今後、通時的視点や位相などにも配慮して考察する必要がある。

- (2) 石野 1993 に「新語性の乏しい略語」としてあげられているものは、「無略+全略」または「全略+無略」のものばかりであり、略語だと認識する意識の中に段階性のあることが指摘されている。
- (3) 混種複合ではカタカナ語が後項に来ることの方が多い。また後項では「脱・サラ(リーマン)、たら(こ)・スパ(ゲティー)」など〈下略〉になる例が圧倒

的に多いのに対し、前項に来る場合は、「ピン(ト)・ほけ(る)、アル(コール)・中(毒)」のようなく下略のほかに、「カー・きち(がい)、ゴム・長(靴)」のようなく無略も目立つというようなことも観察できる。部位による省略形式の偏りについてはさらに詳しく検討する必要がある。

- (4) く下略〉については、窪園 2002 は単独複合にかかわらずく下略〉が略語の原則であるとする。西尾 1980 は、複合略語について「一般に下略をくりかえすものが多い」とし、さらに「ことばは、時間軸にそって一方的に展開するものであるから、後続の部分を省略して受け手の推定に任せたほうが、欠けた先行部分を推定させるより容易であろう。」とする。窪園もく下略〉が語を推定する力のあることを論証している。

逆に、く上略〉について、西尾 1980 は「隠語などの目的に略語法を利用するときには、上略語の手法が向いているのではないか。」(p.126) と述べ、また、早く、榎垣実 1956『隠語辞典』(東京堂出版)に「隠語の効果からいえば、下部を略すより上部を略す方がすぐれている。ただ一音を省略しただけで、ほとんど元の形が想像できなくなってしまう場合が多い」との言及がある。米川 1996 もく上略〉について「元の語形がわかりにくいため秘密保持のための犯罪者隠語によく見られる方法である」(p.38) とする。

いずれもく上略〉く下略〉の特徴について述べているが、それと語種との関係には触れていない。唯一、米川 1989 に「後略語く大槻注一本稿での下略語に相当する〉は外来語に多く見出せる。和語は少な」いと指摘 (p.122) が見られる。

- (5) 「サウン(ド)・トラック」「ファーザ(ー)・コン(プレックス)」「メール・とも(だち)」「バック・クル(回)」「空・オーケ(ストラ)」の傍線部分のような語基中の省略音は、いわゆる音の短縮ではなく、異形態であると考えたい。異形態であるとするためには「規則的に生じること」が必要である。[au]の音列は [u] を落とす (「ワン・バウン(ド)」) し、「メール」が複合語になる時は「メル」(いたメル・メル友) になり、三拍語内の促音は脱落する (「アメ(リカン)・フット(ボール)」) というある程度の規則性が見られるように思う。また、逆に「バスケット」と「シューズ」が複合する際「バッシュ」と促音が挿入されたり「ファースト・キッチン」の省略形が「ファッキン」になったりするものも、異形態と考えられる。

参考文献

〈主に用例収集のために〉

見坊豪紀他 1993『三省堂国語辞典』(第四版)

石野博史 1992『マスコミによくでる短縮語・略語 解説辞典』創拓社

あらかわそうべえ 1977『外来語辞典第二版』角川書店

米川明彦 1989『新語と流行語』南雲堂

同 1996『現代若者ことば考』丸善ライブラリー

同 1997『若者ことば辞典』東京堂出版

同 2000『集団語辞典』東京堂出版

- 小矢野哲夫監修 1993『女子大生用語の基礎知識』
同 1998「仲間ことば」『言語生活研究』
〈造語法に関する論文〉
国立国語研究所 1970『電子計算機による新聞の語彙調査』
野村雅昭 1977「造語法」(『岩波講座日本語9 語彙と意味』)
加藤正信 1982「現代の隠語」(『講座日本語の語彙 現代の語彙』)
玉村文郎 1985「語の構成と造語法」『国立国語研究所 日本語教育指導参考書 13
語彙の研究と教育 (下)』
西尾寅弥 1980「略語の構造」『言語生活』339 (『現代語彙の研究』明治書院所収)
野村雅昭 1988「二字漢語の構造」『日本語学』7-5
森岡健二 1988「略語の条件」『日本語学』7-10
石野博史 1993「略語の造語法」『日本語学』12-10
川上真紀子 2001「造語成分からみた語の省略法の類型化」
早稲田大学大学院文学研究科紀要 47号
大槻美智子 2002「略語と語種—若者言葉の略語とその位置づけ—」
大谷女子大 国文 32号
窪園晴夫 2002『新語はこうして作られる』岩波書店
(本学日本語日本文学科助教授)